

葉集を読む

松岡 隆子

半券は胸のポケット文化の日

平沢千恵子

言葉が弾むように置かれ心地よい旋律を奏でている。必要な言葉だけを残した省略の妙。一句の解釈に季語の「文化の日」は欠かせない。芸術の秋、展覧会、コンサート、観劇等いろんな場面が想定されよう。決め手は半券の覗いている胸ポケット。ダークスーツに身を包んだダンディーな男性が想像される。何となくコンサート会場の雰囲気だ。理詰めで解釈するとつまらなくなる。読者に委ねられた鑑賞の自由を愉しみたい。

すぐ閉まる十一月の昇降機

梶浦 道成

作者は乗り降りする人のないエレベーターを見ていたのか、それとも乗ろうとしたエレベーターが目の前で閉まったのか。十一月がキーワード。秋蘭の趣のある十月と一年の最終月である十二月に挟まれた十一月は何となく中途半端な感じで、何をするわけでもなくいつの間にか過ぎていってしま

う。乗り降りもなく直ぐ閉まるエレベーターは十一月の殺風景な景観の一つのようだ。

違へたる一字気になる一葉忌

植田喜代子

誤字に気が付きながら訂正し忘れてそのまま投函してしまったという。その一字が、誤解を招いたり不快な思いをさせるような字であれば、気になるに違いない。律儀な植田さんのことだ。追ってお詫びの手紙を出されたのではないかと思う。間違いに気が付いていただけに悔やまれたことだろう。一葉忌ゆえに悔いがつのる感じだ。

原稿は明日にまはしておでん鍋

河本 順

締切日が迫っているのに、思うようにペンが進まない書こうとすればするほど言葉が空回りして何も書けない。そんな時は諦めて、おでんでも食べてさっさと寝るのが一番よい。何事も切り替えが肝心だ。河本さんの向日的な生き方は好ましい。

さるぼぼの昔むかしの霜夜なる

堀 真智子

〈さるぼぼ〉とは「這子（ほうこ）の一種で、赤い布で作られ、中に綿を詰めた人形」と辞書にある。岐阜県高山の郷土玩具だそう。山国のしんしんとした霜の夜、子守唄でも聴いているような懐かしさがある。